第９号様式の別紙１

# 補　助　事　業　成　果　書

## １　補助事業の実施方法

### （１）事業の実施体制

●実行委員会形式により、多様な人や団体がそれぞれの専門性や当事者性を活かして参画

＜地域インターンシップ世田谷実行委員会＞

・認定 NPO 法人 CFF ジャパン（青年リーダー育成）

・一般財団法人世田谷コミュニティ財団（世田谷の中間支援）

・NPO インターンシップラボ（全国各地の NPO インターンシップネットワーク）

・昨年度のインターンシップ卒業生

・区内の学生有志

・区内の大学教員有志

●協働事業としての役割分担

【地域インターンシップ世田谷実行委員会の役割】

・事業の企画・運営全般

・インターン生のコーディネート・サポート

・受け入れ団体のコーディネート・サポート

【世田谷区子ども・若者部子ども・若者支援課の役割】

・事業の企画・運営の補助

・事業の周知・広報

・キックオフ研修会での講師

・会議の会場提供等

（2）インターンシップの概要

【活動期間】8 月～9 月　※学生が活動しやすい夏休みに設定

【活動日数】目安として 10 日間以上

【対象学生】世田谷区内または周辺地域に在住・在学の高校生・大学生

【受け入れ団体】

以下の 4 点をおおまかな目安として、候補となる団体を訪問し、打ち合わせの上で受け入れ団体となることを依頼した。

①実行委員会メンバーと関係性がある（何かあっても許容してくれる）

②学生やボランティアの受け入れ経験がある

③リアルな拠点がある

④活動分野や地域が適度にばらける

【集合イベント】

・活動開始前に、学生向けのキックオフ研修会＆学生と団体のマッチング会を開催

・活動中は、学生・団体それぞれの集まりで状況を共有

・活動後に、報告会を開催

（3）インターンシップの広報（学生の募集）

- 実行委員会としての web サイトを作成し、ほかボランティア情報サイト等でも広報を行った。
- チラシを作成し、子ども・若者支援課経由で関係機関に配架を依頼した。
- つながりのある大学教員の方に広報協力を依頼し、一部では授業にも登壇して事業の説明を行った（駒澤大学）。

※あわせて運営資金のクラウドファンディングを

実行委員会の構成団体である世田谷コニュニティ財団の web サイトにて行った。

（４）新型コロナウイルス感染症への対応

- マッチング会は会場を広い場所に変更の上でハイブリッド形式にして実施。
- インターン活動開始にあたっては、ちょうど感染のピークに重なったため、注意点を取りまとめてインターン生と受け入れ団体に周知した。
- インターン活動はおおむね予定通りに実施できたが、感染が契機となった家族の反対により活動を辞退したインターン生もいた。

（５）インターンシップの振り返り

●インターン生向けのアンケートを実施し、それを踏まえて意見交換会を行った。

【アンケート項目】

・満足度（インターン活動の時期・回数・活動の内容・運営側のサポート）

・よかった点・悪かった点、具体的な提案

・今後の関わり（受け入れ団体や地域に関して、この事業の運営に関して）

●受け入れ団体のヒアリング

個別に各団体をまわり、当年度のインターン受け入れの振り返りと次年度に向けた希望や要望についてヒアリングを行った。

【ヒアリング項目】

・インターン受け入れの感想、よかったことと課題

・次年度受け入れ希望について

・プログラムの改善点や要望について

・若者の受受け入れに関する勉強会について

・長期プロジェクト型インターンについて

## ２　補助事業の成果の具体的内容

（１）インターンシップに参加した学生

・20 名程度の目標に対して、27 名が応募

・最終的には 16 名がインターン活動を実施（昨年度は 10 名）

※うち半数が世田谷区内に在住または在学

（２）インターンを受け入れた団体

目標通りに 10 団体がインターンを受け入れ（昨年度は 4 団体）

| 団体名 | 活動分野 |
|---|---|
| NPO 法人 neomura | まちづくり（用賀） |
| 一般社団法人おやまちプロジェクト | まちづくり（尾山台の商店街） |
| NPO 法人せたがや子育てネット | 子育て支援 |
| 放課後等デイサービス 凸凹 Kids すぺいす | 障害児支援 |
| 羽根木プレーパーク | 子ども・外遊び |
| 100 人の本屋さん | まちづくり（松陰神社前） |
| ハーモニー | 精神障害者支援 |
| 祖師谷ごちゃ混ぜプロジェクト（わーぷれ） | 子ども・子育て支援・まちづくり |
| 岡さんのいえ TOMO | 多世代の居場所づくり（上北沢） |
| 一般財団法人世田谷コミュニティ財団 | 中間支援 |

（３）キックオフ研修会＆マッチング会（7/24@世田谷文化生活情報センター）

【内容】

・世田谷区の若者支援や世田谷の市民活動について（講義）

・インターンの目標を考えるワーク

・インターン活動時の注意点

・受け入れ団体の活動紹介と相談会　など

（4）インターン活動（8 月～9 月）

- 活動事例としてイベント運営、子どもと一緒に遊ぶ、高齢者と交流、拠点の環境整備など
- 1 人あたり 10 回の活動回数を目安にしていたが、それを超えて日常的に活動に参加する学生も複数いた。
- インターン生の LINE グループにおいて、写真付きの日誌で日々の活動報告をしてもらった。

（5）学生シェアリング会と受け入れ団体会議

●学生シェアリング会：受け入れ団体の拠点を会場にして実施

・1 回目：8/18@100 人の本屋さん

・2 回目：9/22@タタタハウス

・活動内容をお互いに共有するとともに、インターンでの学びについて話し合う

●受け入れ団体会議：8/30 にオンラインで実施

受け入れ状況の共有とともに、インターン受け入れが団体にもたらす価値や今後のインターンプログラムについて考えた。

（６）活動報告会（10/30@カタリスト BA）

【内容】

・インターン生からの報告と受け入れ団体からのコメント

・質問、交流タイム　※プレゼンによる報告よりも少人数での質問形式を重視

・グループワーク

（７）振り返りで出た主な意見

●学生より（12/15 意見交換会@世田谷区役所）

・学生と団体とのマッチングについて（団体についての情報提供）

・学生向けの効果的な広報について

・インターンのモチベーション（スタッフとボランティアの違い、目的の重要性）

・世田谷でインターンシッププログラムがある意義　など

●受け入れ団体より（2 月後半の各団体でのヒアリング）

・学生と団体とのマッチングについて（現場見学の必要性、求める人物像）

・学生に向けたインターンプログラムの見せ方

・インターン生の活動についての情報の蓄積や引き継ぎについて　など

（８）その他波及効果

●シンポジウムで登壇

行政と協働で実施しているインターンシッププログラムとして注目され、NPO インターンシップラボ主催のシンポジウム（9/18）で登壇し、全国各地から集まった参加者向けに「NPO インターンシップのはじめ方」をテーマに世田谷の事例報告を行った。

●世田谷区の松村副区長よりヒアリング（2/7）

地域インターンシップ世田谷の活動内容と ICT 活用状況について

## ３　成果の自己評価

（１）事業に関する成果

● 昨年度は民間の助成金を受けてトライアル的に事業を始めたが、本年度 2 年目にしてインターンの人数や期間、受け入れ団体数を拡大させ、本格的な実施となった。メインの短期インターン（活動体験）についてはおおむね計画通りに進められた。一方で、プラスアルファで考えていた長期インターンやクラウドファンディングについては、計画不足もあっ

て思うように進捗しなかったが、代わりに 11 月以降は次年度以降に向けたニーズ調査を行い、学生や団体の実状を把握することができた。

- 事業の目的通りに、若者が世田谷の地域の活動に出会い、活動する場をつくることができた。同時に受け入れ側の団体にとっても活動の活性化や多様化につながった。印象に残った点としては、インターン生が自団体での活動の中で、他のインターン受け入れ団体に訪問して交流するなどの広がりが見られたこと、自分や団体の活動だけでなく「世田谷の地域づくりをどうするか」を考えたいとの声があったことである。
- 何かと「目的」や「計画」を求めがちな世情であるが、受け入れ団体の活動には、やることが決まっていない「あいまいさ」がポジティブな意味で存在することが多く、若者であるインターン生はそのギャップに悩みながらも、何らか気づきを得られたのではないかと思われる。

（2）事業に関する課題と可能性

【事業実施体制の強化】

本年度は暫定的な体制で臨んだが、次年度以降は「地域インターンシップ実行委員会」が正式な事業主体となり、事務局体制を整える。それにより受け入れ団体としっかり連携をしつつ、実行委員会内での役割分担を明確にし、学生運営スタッフが主体的に活躍できるようコーディネートしていく。

【広報や情報発信の強化】

本年度は特定の web サイト経由でのインターン応募が多かった。大学や他団体との連携を強化し、学生への広報経路を拡大させる。

また、インターンの活動情報が蓄積され、常に見えるようにする。それによって新たな若者がインターン活動に興味を持ち、活動を始めやすいようにしたい。

【学生と団体のマッチング方法の進化】

インターンをする前の活動現場への訪問、団体ごとのインターン募集要項の提示等により、学生がさまざまな活動や人と出会えるようにするとともに、お互いの求めている情報を媒

介させる。

【地域インターンシップコミュニティづくり】

現状ではこの事業は、学生にとって地域の団体への入り口となり、受け入れ団体にとっても若者との接点になっているが、それだけではなく、インターンシッププログラムにかかわる人同士で学びやアクションが生まれるコミュニティに育てたい。インターン卒業生や関心のある大学教員有志、受け入れ団体等でのコミュニティを強化し、事業の支え手となってことを目指す。

（３）協働に関する成果

- インターンシッププログラムはさまざまな学生や団体を巻き込んでいく事業であるが、区との協働事業であることで事業としての信頼性が高まり、団体へのインターン受け入れ依頼、学生への広報等がしやすくなった。
- 会議で区職員と若者が顔を合わせることで、若者に行政の存在を身近に感じてもらうことができた。さまざまな関係機関が関わったことにより、学生シェアリング会にさまざまな人が参加し、インターン生がいろいろな大人と話せてよかったとの声があった。

（４）協働に関する課題と可能性

- 協働事業であることには大いに意味があったが、具体的な役割分担について、本年度は団体側（実行委員会側）が企画した事業の中で、区の効果的な役割について見えにくいところがあった。事業を進めていく中で区がかかわることによる新たな可能性が見えてきたので、次年度は学生が区役所をより身近に感じられるような企画にトライしたい。
- 団体側が主導して実行委員会形式で進めているプロジェクトであり、そこからさらに区役所へ、となると担当課への情報共有のタイムラグや漏れが生じてしまいがちだった。次年度は、実行委員会とシームレスになるようなコミュニケーションツールや会議の持ち方について検討していく。